

「感動した！」に感動する世の中、 言わせる君たちが言葉も駆使する プレイヤーであれば天下無敵

三木ひろみ
体育科学系講師

この原稿を依頼されてから、日本語能力に関する論述を新聞や雑誌でよく目にするようになった。妊娠中にも同じような感覚、街にやたら妊婦さんが増えた気がしたことを思い出した。漠然と抱いている考えはあるようでも、それをどう表わすことができるか不安に思っているからかもしれない。

「日本語力と身体感覚磨け」

1月5日の朝刊には、「声に出して読みたい日本語」の著者である斎藤孝氏の次のような意見が「日本語力と身体感覚磨け」と題して掲載されていた(朝日新聞朝刊オピニオン欄)。教育の基本は、からだづくりと日本語力である。日本語力は、反復練習して基本技として身につける。からだについては、自然体をつくるとともに、レスポンス(応答)できるからだをつくるのが重要である。ほかの人に対する基本的なレスポンスである

あいさつ、アイコンタクト、うなずき等も、ある程度意識的に練習すべきであり、このような演劇的な感覚は、学校教育に積極的に取り入れる価値がある。日本語力については、小学校で、最高級の日本語を膨大にこなすことで、格段に向上するだろうという意見である。

反復練習で、膨大な量の練習をこなし、力と感覚を身につけていくといえば、学内では体育専門学群の学生が最も得意とすることである。素晴らしい技、スピード、巧みなプレイ、高いパフォーマンス、どうしてそんなことができるのかと尋ねると、「こうしようと思ってやっているんじゃない。自然に身体が動くんです」、「何も考えずに、自分らしく自然にプレイするだけです」という答えが返ってくる。この能力は運動に限ったことではない。外国語センターで実施されている英語検定試験の不合格者を対象に補習授業をしていて、にわか英

語教師が最初につかかった壁がこれである。一流の競技者であり、かつ勤勉な何人かの学生が、ある時期を境に私が出題する文法問題の正答率を急激に伸ばしてきた。大喜びで、「やればできるじゃない。分かるようになったでしょ」と聞くと、「文法は何となくという程度だけど、先生がこれを答えにしそうというのが分かってきたから」と申し訳なさそうに言う。彼らは補習の授業や小テストで、英文法を学んでいたというよりは、彼らの対戦相手である私の思考・行動傾向を読んでいたのである。意図的ではなく、おそらく知らず知らずのうちに、彼らは慣れ親しんだ流儀で補習という反復練習をし、結果的にそうってしまったのだと思う。それはそれで学習であり、私が出すような問題は「できる」ようになったのだから無意味とは言えないが、英検突破にも彼らの英語力向上にも程遠い学習をさせてしまった。

丸暗記の苦痛緩和：遊ぶこと、理解すること

齋藤氏が推奨する暗誦・朗誦は、高校時代によくやらされた懐かしい学習法である。百人一首やら奥の細道やら諸々の漢詩やらをひたすら暗誦させられた。とにかく覚えなければならない、ひたすら

繰り返すしかない。となると、完璧ではないがある程度覚えてきたところで、その「反復するだけ」ということが苦痛になってくる。そこで、暗誦反復に苦しむ友達同士の間では、会話や授業中に密かに回されるメモにそれらの名文がはさまれるようになる。名文、名句を替え歌したり茶化したりという遊びで、何とかこの苦痛を軽減しよう、少しでも楽しもうとしたのである。これは、基本的なスキルをマスターしたスポーツ選手が、それを使って遊びながら少しずつ自分なりのスキルへと発展させていくことと似ている。スキルがしっかり定着し安定していくにつれて余裕ができ、変形の仕方を思いつくこともそれを試すことも容易になる。ただし、これはあくまでも、学ぶべき適切な内容がある程度まで身についた状態で初めて可能になることである。英検補習授業で前述の学生が学んだことは、学ぶべき内容の核心ではなかった。そして、そのやり方で学んだことを自分の能力として身につけていこうとすれば、私と違ったタイプの様々な相手（教官）と対峙（補習）して、最終的には本質に近づき（文法を理解し）、遊べる（自習する）余裕を持てるようになっていかなければならないだろう。それまでにはずいぶん時間と労力がかかりそうだ。

難しい課題を前にし、大量の情報を扱ったり集めたりしなければならないことが予想される時、それをこなそうという意欲や義務感が十分強くなかったり、キャパシティが不十分であれば、学習者が努力を繰り返す反復学習を採用することはほとんど期待できない。最悪の場合は、即座に「できません」という言葉が発せられる（そのすばやさから、どうしたらいいのか考えてみたり、一応チャレンジはしたという過程を経過していないことが推測される）。この一言で、知っておくべき情報の山も考え出すべき手順の数々も一瞬にして消える。

では、努力を繰り返す覚悟がなく、この魔法の言葉も通じない時は、どうすればいいか。膨大な情報量を何とか圧縮するには、情報を関連づけて構造化するという処理が必要である。つまり、「分かる」ことである。教育心理学者の市川伸一氏が言うように、わかった時の快感というのは、丸暗記による記憶の負担から開放された喜びを表わしている。

「分かりやすい」授業が伝えているもの

知っておかなければならない情報や役に立ちそうな情報に囲まれたり、それらをかき集めてしまったりする私たちは、情報を関連づけて構造化し、分かって喜

び、またほっとする。難解な問題を美しくもシンプルなモデルにまとめ、この喜びを人に伝えることができた時の快感はまた格別である。きれいな図表や整然としたフローチャートを大画面に写し出して進めていく授業は学生にも好評だ。大型授業でも、伝えたい内容の核心を教室の隅々まで照射できる。学生自身も積極的にこの方法を使っている。

ところが、彼らの図表やチャートの全てが、情報を構造化し理解した結果生まれたものであるとは限らない。例えば、枠で囲って並べられている事柄の順序の後先について尋ねてみると、「別の順序で並べ替えてもいいです」と言う。卒業論文には、箇条書きを並べて枠で囲んだだけの「表」が続く。中黒・ならば順番も気にしなくもいいと言う訳か、中黒の箇条書きは本文中にも頻繁に出てくる。実験方法や手続きの節、事象の変化について考察するページには→が何本も引かれている。そして、項を立てる代わりに時折1、2行の空白行がはさまれている。尋ねてみれば、「ここで内容が変わるので、1、2行空けた方がいいかと思って」という。こうした図表やチャートなどは、情報が関連づけられ理解されて得られた構造を示しているものではない。理解を省略してもよいという御墨付きをも

らった省略記号であるかのように、気軽に使われているというだけである。授業のために多くの重要な情報を苦勞して図表やチャートにまとめても、授業中の彼らの瞳にはそのイメージが写っているだけで、構造化され表現されたものの本質である理解は、彼らの中まで伝わっていないのかもしれない。そう思うと、「分かりやすい」という授業の評判が恐ろしくなってくる。

感動詞を叫ぶ時代

1月1日付の朝刊では井上ひさし氏が次のように述べていた。子どもが言語を習得していき、基本的な生活語彙が完備されるのは就学前後だが、その総仕上げとなるのが接続詞の習得である。「でもさ」で文脈を転換し、「それからさ」で前の文に新しい意味を加え、「それでね」で先行文を後ろへとつなぎ、「だから、そうすると、そうしたら」で考えを先へ先へと展開する。獲得した膨大な語彙群を整理するのも接続詞の役目である。接続詞を駆使することで秩序づけられた世界観、「世界はこういうものらしいぞ。それならばこう生きていこう」という見方のもとに、彼らはそれぞれの人生観を築きあげる。接続詞こそが<考えるヒト>をつくる。ところが、最近の私たちは、考える

ための最良の武器である、この接続詞をあまり使わなくなった。昔なら十年に一回というような大事件が続けざまに起きるのでそのたびに思考が断ち切れ感動詞を叫ぶだけ、接続詞を使う余裕を失ってしまった。(朝日新聞朝刊文化欄「接続詞のない時代に」から抜粋)

町中で私に多くの妊婦さんを感知させていた娘も11歳になり、「だって～だもん」、「だから、こうするんじゃない」と口をとがらせて人生観を語るようになった。「本当は分かっているくせに。質問してくるのはいじわるだからだあ」と彼女が評する母親に、自分の言いたいことが伝わらず苛々することもある。物わがりの悪い親に「それで?」と言われると、「だからあ、もう一度言うよ。良く聞いていなさいね」と続けてくれる愛情と熱意に支えられて、互いに少しずつ理解が深まっていくような気がする。

体專の学生には、「感動した!」と言わせる自分達のすばらしさをもっと理解してほしい。そのすばらしさを人に伝えられるように理解してほしい。自然体で人にレスポンスするだけでなく、その時にも人を感じ思っしてほしい。そのためには、言葉や考えを省略せずに、ああでもないこうでもない、いくつも接続詞をつなげて考え、伝える努力をすることで

ある。

私自身はと言えば、字数内でうまく自分の考えを伝えられない能力でありながら人に対する要求ばかり高くて申し訳な

いが、せめて自分にできることはしたい。だから、これからも物わかりの悪い口うるさい教官でいようと思う。

(みきひろみ 体育心理学専攻)

